

研究と教育を結ぶもの

谷川彰英
教育学系教授

○大学の授業の新しいスタイル

大学における私の授業に関する姿勢は前任校の千葉大学教育学部に在任中に確立されたものである。

大学の授業は「講義」と「演習」等に分かれるが、当然のことながら、私もその双方を担当していた。千葉大学教育学部は、教員養成を目的とした目的的な大学教育を行うところで、卒業生の多くは小中学校の教員として巣立っていった。

千葉大学に赴任して私がまず直面した課題は、どのようにして学生をひきつける講義をするかであった。教育学を専門とする教員がつまらない授業を行っているという理由はもちろんない。むしろ、教育というものに強い関心と理解を持つ学生に育てなければ意味はない。これは当然の道理である。

将来教員を目指す学生たちを教えてみてまずわかったことがある。それは学生というものは実践的な話、つまり現実の

授業の話をするとうるを輝かして聞くという事実だった。裏を返せば、歴史的な話やどこかから借りてきた話をするとう、寝てしまうということである。

私の授業は、どうやって学生を眠らさせないかという戦いの場であったように思う。

そこで、なるべく生の具体的な実践の話をするように努めたが、その実践も他人の授業ではなく、自分自身で体験した話のほうがより効果的であることは自明であった。

そこで、考えついたのが、開講している演習で教材開発をし、実際に小中学校で実践するという試みであった。

私は小中学校の教員の経験はないので、ある一定期間学校に所属して授業を実践するというわけにはいかない。

そこで、演習の学生たちと教材開発し、それを実践させていただくなかで、私自身も1時間くらい授業をさせていた

だくというスタイルをとった。

結果的にはこれが成功した。実際に教材開発して実践した授業づくりの話をする、学生たちは身を乗り出すように話を聞いてくれた。しかも、その授業づくりに参加した学生たちは、ほぼ同じ学年の学生だったから、よけい親近感を持たせることになった。

○社会的評価

これは研究と教育を結ぶ新しいシステムであった。教材開発の中身は私の研究関心から選択した。その中身からどんな教材を選択し、どのように授業をつくるかについては、私の研究というよりも学生指導の面が強調された。そしてその成果を講義に活かしていく。これは研究と教育を結びつけた新しいスタイルとして注目された。

私がこれまでこのスタイルで開発してきた教材は大きく分けて3つある。千葉大時代に開発したものが「地名」である。この活動に7年かけた。

筑波大学に移ってすぐとりかかったのが「食べ物」であった。これで10年かけた。さらにその後「マンガ」に挑戦してきた。これも今年度で7年目になる。

この授業づくりを通じて開発してきた成果は、一方でその内容面で社会的評価

を獲得してきた。これは思いもかけない副産物であった。

私が書いてきた本の中でも、『地名に学ぶ』『地名を生かした社会科授業』（いずれも、黎明書房）は実践を中心にした教育書だが、『地名教室』（ニューファミリー新聞社）は千葉県の東葛地域に地名をまとめた純粋な地名の本だし、最近出した『地名の魅力』（白水社）は完全に地理や歴史の本として売られている。

また、食べ物に関しては、10年の年月をかけたが、これがこの2年ほど前から花を開いている。近年、食の問題が話題を呼んでいるが、総合的な学習の時間の新設に伴って学校栄養職員が授業に参加することが増え、かつて私が開発してきた食べ物の教材化が今評価されている。その内容は今年の夏『食の授業をデザインする。』（全国学校給食協会）として出版した。

さらに現在継続中のマンガに関しては、2年前に『マンガ教師に見えなかった世界』（白水社）としてまとめた。

○柳田国男の発想

今の私の仕事は教育学という柱の他に、地名、食、マンガという3本柱を加えたかたちで進んでいる。世間では、何の専門かと聞かれることが多いが、基本

は教育学だと答えることにしている。

私の教育学研究の根拠を流れているのは、柳田国男研究である。柳田は日本民俗学の創始者として知られるが、他方、教育について実に多くの発言を行っている。柳田学の背景には実は教育思想が流れていた。そのことを実証的に分析したのが私の論文であった。

周知の通り、柳田は日本人の生活や誠心を探求するために、膨大な情報を収集し、そのデータに加えて独特の文学的直感力で次から次から著作を世に問うた。それは狭い民俗学ではなく、日本という国、日本人、日本人の生活を根底から問い治す志向性を持ったものであった。

私の学位論文は『柳田国男 教育論の発生と継承』（三一書房）として出版した。書名に「継承」と入れたのは、柳田の思想を直に受け継いでいきたいという願いのようなものであった。

この本の最後に、地名教育についてふれているが、この地名教育こそまさに私の大学の授業から生まれた研究と教育の産物であったのである。

○新羅万象

教育評論家の阿部進氏が、私の仕事について、「新羅万象あらゆるものが教材になってしまう」と評してくれたことが

ある。

たしかにそうなのかもしれない。私は人を取り巻いているあらゆるものに学べると考えている人間である。だから、学類一年生を対象にした授業でも、学生をキャンパスに出して、「けもの道」さがしの活動をさせたこともある。

もともとは小学校低学年の生活科でやるような授業だが、学生たちはけっこう楽しんでけもの道さがしをやる。

結局、私にとっては、研究も教育も社会的活動も全て同じルーツから出ており、同じものなのである。この発想は一般的な学者のそれとはかなりずれてしまっているかもしれない。

でも、自分としてはこれほど矛盾無く仕事ができることはこの上なく、楽しい。

最近、私の本は本屋の中でも種類によって全く違ったところに置かれている。これがいいかどうかは正直わからない。

（たにかわあきひで 社会科教育学）